

# 独創の原点

私の「特別研究員・海外特別研究員」時代

## 科学思想と社会制度の歴史の細部に学ぶ

隠岐さや香  
名古屋大学大学院 経済学研究科  
社会経済システム専攻 教授



隠岐さや香 (おき・さやか)

名古屋大学大学院 経済学研究科  
社会経済システム専攻 教授

1975年生まれ。博士(学術)。東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了。2000年4月～03年3月、特別研究員-DC1。2005年4月～08年3月、特別研究員-PD。フランス国立人口学研究所 客員研究員、広島大学大学院総合科学研究所 准教授などを経て、2016年より現職。

科学史家の隠岐さや香さんは、特別研究員時代にフランスで研究。

「現地に行かないと見ることができない18世紀の膨大な手書き史料と格闘し、

科学思想と社会制度の細部を再現する研究をしました。そのときに得たものが、私の研究者人生を変えました」

そう語る隠岐さんの独創の原点とは？

### 文系と理系に分かれた受験制度に苦しむ

——子どものころ、何に興味を持っていましたか。

隠岐：5歳から12歳までタイ、オーストリア、フランスで過ごしました。小学生のとき、望遠鏡をパリの夜空に向けてたり、ハレー彗星が地球に接近するニュースを聞いたり、天王星などを観測したボイジャー計画を紹介したテレビ番組を見たりして、宇宙に興味を持ちました。一方で、『ベルサイユのばら』や『源氏物語』の世界を描いた漫画を読んで、歴史も好きになりました。

文系と理系のどちらにも興味がありましたが、高校2年生のときのクラス分けで、理系クラスに入りました。でもなぜか数学のテストになると不安になり、動悸がして問題を解けません。そこで3年生では文系クラスへ移りました。東京大学を志望しましたが、その文系クラスでは受験に必要な理系科目が学べない制度でした。そこで、通信教育により独学で物理を勉強してセンター試験を受けました。文系と理系に分かれた受験制度に苦労した経験から、文系と理系はなぜ分かれたのか、に興味を持つようになりました。

### 科学者と国が関わりを持ち始めた18世紀フランスに着目する

——東京大学教養学部へ進み、科学史を専攻した理由は？

隠岐：文系と理系の両方を研究対象にできると思ったからです。科学史の対象は広く、卒業論文を書くには、どこかの国

と時代に絞込む必要があります。科学史の研究室には文系と理系の両方の学生が来ます。文系の私には、最新の科学知識も必要となる現代の科学史よりも、古い時代に適性があると思いました。また、フランス語が得意だったこともあり、18世紀のフランスを選びました。科学者と国や社会が関わりを持ち始めた時代です。

そのころ、ちくま新書の『フーコー入門』(中山 元)を読み、フランスの哲学者ミシェル・フーコーに大きな影響を受けました。現在は当然だと思って使っている単語や分類も時代をさかのぼると違う意味・カテゴリーで使われている例がある、とフーコーは指摘しています。例えば、数学は何を対象にする学問であるか、数学はどういう問題に適用可能かも、現在と過去では考え方が異なります。私は、18世紀のフランスで数学を投票行動などの人間や社会の問題に適用し始めた、数学者・思想家のコンドルセ(1743～94年)の科学思想をテーマに、卒業論文を書きました。

大学院修士課程に進んだとき、フランスの社会科学高等研究院(EHESS)のÉric Brian教授の著書に出会いました。18世紀のパリ王立科学アカデミーやコンドルセについて書かれた本です。同アカデミーは当時、100人足らずの学者集団でした。その時代の大学には居場所を持たなかった自然科学分野の学者が集まり、国から給与をもらっていましたが、その額はそれほど多くなく、しかも王政期ですから、いつ資金供給が止まるか分からない不安定な状況でした。コンドルセはその科学アカデミーの終身書記としてスポークスマンの役割をしました。

中世カトリック社会では、人口を調べることはよくない行為だと考えられていました。それが18世紀のフランスでは、各地教会の洗礼者・埋葬者数を人口サンプルに見立てて、数学によって国全体の人口を計算する人口推計が試みられるようになりました。政府はそのデータ収集を秘密裏に行政官に行わせて、推計を科学アカデミーの数学者たちが担当しました。Brian教授の本は、政府と科学者との関係、当時の社会状況や文化、教育など、人口推計が行われるようになった背景を、細部にわたり再構成していました。私がやりたいのはこういう研究だ！と思いました。

## 現地でしか見ることのできない 手書き史料と格闘

—その後、2001年にフランスに研究留学されました。

隠岐：特別研究員に採用されたおかげで、Brian教授のもとに学びに行くことができたのです。歴史研究は、現地でなければできないことがたくさんあります。科学アカデミーのことが書かれた18世紀の手書きのメモなどがパリを中心に保存されています。それら膨大な史料を読み込んで、過去を再構成していく仕事をしました。

この時代、政府からの要請で科学アカデミーがさまざまな社会問題に関わるようになります。例えば、建設予定の運河について二つのルート案がある場合、どちらのルートがよいか流体力学を使って提言を行ったりしています。そのような活動により、科学は社会に役立つという認識が少しずつ出来上がっていきました。現在の私たちの科学に対する考え方が形づくられ始めた時代です。

—どのような視点で研究を行ったのですか。

隠岐：私は一つの謎を解きたくて、その時代の研究を進めました。修士課程のとき、東大の図書館に保存されているパリ王立科学アカデミーの『年誌・論文集』を見つけました。その中に「エコノミー」というカテゴリーがあり、病院の移転問題や麦の価格の決め方、河川の公共事業などに関する論文が分類されていました。現在ではエコノミーは経済の意味ですが、それらのテーマがなぜエコノミーというカテゴリーに分類されていたのか謎でした。当時の人たちの科学思想や社会制度の細部を描き出し、エコノミーという概念の謎を解く研究を進めました。その結果、現在では商業と強く結び付いているこの言葉が、当時はむしろ家政あるいは国政、そのために有用な科学知識の用い方といった意味合いで使われることがあったと分かってきました。

## 創造的な人たちは歴史の細部から学ぶ

—2011年に出された書籍『科学アカデミーと「有用な科学」』は、パピルス賞やサントリー学芸賞などを受賞されました。

隠岐：2006年までフランスで行った研究をもとに学位論文を2008年に完成させました。それにかなりの加筆をしたの

がその本です。ある読者は、パリ王立科学アカデミーのことは知っていたが、科学史をこれほど細かく臨場感を持って描いた本は初めてだ、そこが面白い、と評価してくださいました。私は特別研究員としてフランスで学ぶことで、科学史の細部を探究する研究者として生きる道を得たのです。

—なぜ歴史の細部が重要なのですか。

隠岐：歴史は1回限りの出来事です。まったく同じことが繰り返されることはないので法則性が見だしにくく、歴史から明確で分かりやすいメッセージは読み取りにくいものです。ただし、過去の歴史と同じようなことが少し違う形で起きることがあります。たくさんの過去の事例や細部に、その違いを知るためのヒントが隠されています。創造的な人たちは歴史の細部に学びインスピレーションを得て未来を予測しています。歴史は細部をそぎ落としてはいけない学問なのです。

—2018年には『文系と理系はなぜ分かれたのか』（星海社新書）を上梓され、「新書大賞2019」の第2位に選ばれるなど、こちらも大きな反響を呼んでいます。

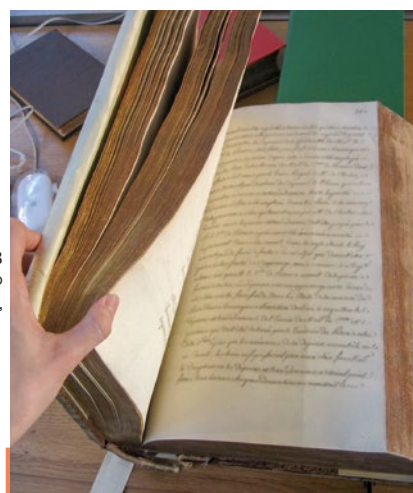
隠岐：現在、学問の分類を19世紀まで視野を広げて追っています。その中で明治期の日本において文系と理系が分かれた過程も研究しています。私たちの文系と理系に対する考え方が築かれた背景を描き出すために、過去の学問分類をキーワードに探究しているのです。

—科学史を学ぶ若手にメッセージをいただけますか。

隠岐：その若手自体がいなくなりつつあります。科学史の研究室に大学院生がなかなか来なくなり、後継者が育ちづらく学問継承が危機的な状況です。最近の日本では、歴史の細部やそれを積み重ねた歴史の厚みを語るものが軽視される傾向にあるように思います。科学史となるとそれに加えて理系の素養が要るので、なおさら若手が来づらいのです。歴史の細部は複雑で分かりにくく、効率よく学べるものではありません。歴史の価値を認識する余裕がない人たちが増えているのでしょう。一方で、一部地域の教育環境で育った人たちはもともと歴史の重要性を認識し、それを活かせる状況にあり、彼ら彼女らの間で専門的な教育・研究が担われる状況が強まっている、つまり格差が広がっているように思えてなりません。

ぜひ、さまざまな学問の価値を正当に評価し、幅広く支援する社会であってほしいと思います。

(取材・構成：立山 晃／フotonクリエイト)  
令和元年9月26日取材



フランスで読み込んだ18世紀の手書き史料の一つ (Archives Nationale, série O1)